

仙人通信 87 甲武信ヶ岳 (2475m)

甲武信ヶ岳は山名が示す通り、甲州・武州・信州の境界で笛吹川(富士川)・神流川(荒川)・千曲川(信濃川)の分水嶺である。今回は最短距離で登れる信濃川上から西沢に沿ってのコースとした。高原野菜の中の道から林道を進むと登山者のために設けられた毛木平駐車場である。林道のゲートを過ぎると、白樺林の林床にはピンクのミヤマモチズリや黄色いマルハダケフキが沢山咲いているが、夏も過ぎ花達にはもう元気がない。5分程で十文字峠への道と分岐し、瀬音を聞きながら整備された林道を20分程進むと可愛らしい祠の大山祇神社の前に出る。さらに20分で慰霊碑があり、その先で林道は終わる。千曲川源流遊歩道と書かれた道標のある登山道となる。V字状の谷間の道は、沢の西側を巻く部分もあるが、ほぼ平坦な林の中の道である。唐松が主体の林道には木漏れ日程度で薄暗いもアキノキリンソウ・ハナイカダ・トリカブトが咲き、ヒタキ科のノゴマやミソザザが足元まで飛んでくる静かな山路である。スタートから80分でナメ滝である。一枚の石英閃緑岩の上を水が送り走る様は、なかなかのものである。小さな沢に掛かった橋を渡ろうとすると、肌色のトラキチランが1本咲いているではないか。誰も振り向くことのない花であるが、精一杯さに思わずカメラを取り出してしまった。高度が上がるに従い、トウヒ・ツガ・ダケカンバ等が多くなっていく。急な登りではないが、沢に架かる橋を何度も過ぎる。水藻が靡く透き通した瀬を横に見ながら、進む登山道はスギゴケ・ヒノキゴケ等が生き生きしている。ナメ滝から100分で千曲川源流のポールが立つ地点である。石英閃緑岩で濾過された源流水で顔を洗い、水を含んで診た。ここでしか味わえない柔らかい感じの美味しい水であった。唐松の急登を20分程登ると、国師ヶ岳からの縦走路に出る。梢越しに黒金山と奥千丈が望める。尾根路はシラビソ・ナナカマド・ダケカンバそして石楠花であるが、この時期は葉のみである。最後の急登になると時折子供達の声が聞える。若い先生の引率した地元川上村の小学生の遠足だそうである。分岐から30分(スタートから3時間50分)で100

名山の山頂に立てた。真正面に黒い富士山が雲に浮かぶ。東側は樹林で展望はないが、眼下には黒金山・奥千丈・国師・金峰その隣に北岳・間岳・農鳥・甲斐駒ヶ岳・八ヶ岳・烏帽子岳と西半分は青空にクッキリと望める。甲武信の山頂部分は、玄武岩の南上がり節理である。深生岩である石英閃緑岩の上に出来た節理に興味を感じた。金峰から国師・甲武信・笠取・小金沢そして御坂へと繋がる石英閃緑岩帯との関係等無い頭を使った。ナメ滝の近くで足音も立てずに、後から近づいて来て、熊かと思ひ肝を潰させられた地元ケーブルテレビのカメラマンは、小学生の遠足取材に来たそうで一頻り、カメラを廻されて、小生と四方山話をして小学生の跡を追われた。一人静かになった山頂には開花の時期を過ぎたコメツツジ・コケモモ・イワカガミが観られ、花を想像しながら30分間ほど憩い往路を辿った7時間半の苔むす秩父の山旅でした。(h 2 1 . 9 . 7)

山頂より富士



山頂



トリカブト

